



森のなかま

2009年 9月号

NO.17 (継続162)

NPO法人かながわ森林インストラクターの会 <http://www.forest-kanagawa.jp>

発行人 島岡 功

新説・かながわのブナ林(帯)文化 (2) - 山頂・尾根筋聖地論

飯村 武

「ブナ退治」という言葉があった。昭和初期頃からの流行語で、そのルーツはパルプ・製紙にある。紙の原料は木材繊維だ。今はともかく、繊維は長いほど良いとされた。しかし、ブナは短く(3mmぐらい)紙の原料としては不可とされた。つまり、ブナ林は無用の長物で、その退治は国策ともなり、有用なカラマツに樹種転換されて行った。当然、丹沢のブナ林にもこんな風潮が色濃くなっていった。

第2次世界大戦時の乱伐で、わが国の森林は極度に荒廃した。林野庁はまず、国土復旧造林事業を打ち出し、そのために治山・林道・造林の3つを公共事業に位置づけて進めることとなった。

復旧造林はやがて拡大造林事業へと展開されてゆく。昭和30年代初期のことで、この方向は燃料革命で無用となった雑木林(薪炭林)の林種転換を図るものであり、山村地域の次三男対策でもあった。

治山、造林を進めるには先ず林道である。林道は森林組合を軸として、地元が競って誘致した。その旗印(ネーミング)は「奥地林開発林道事業」で、丹沢ではブナ帯直下までの建設を目標とした。かくて建設されたのが玄倉林道など数路線で、目前には宿命を待つブナ林が静かに広がっていた。

これらの奥地林開発林道をベースに、各流域ではまず、スギ、ヒノキの造林が進められ、一方、密かにブナ林のカラマツへの林種転換計画が練られていた。昭和31年から始まった「適地適木土壌調査」の結果でも、丹沢主稜が造林の立地である事が示された。

林業における3つの公共事業は、山村振興の推進を期する上で欠かせない。しかし、官公の事業はとかく画一的になりがちで、往々にして自然の摂理を無視して推し進められることがある。山頂や尾根筋にいと簡単に林道が建設され、造林が進められるなどである。このような林野行政事業の実態を横目で睨み、異を唱えていたヒトがいた。宮沢さんである。宮沢さんは昭和42年に県の出先機関の長を最後に退職された。

話は遡って、昭和12年から同20年まで(第2次世界大戦中)丹沢札掛に県立丹沢報国寮が運営されていた。県下の青年達を集め、森林事業の実践と林業教育を目的としたもので、宮沢さんは初代の寮長であった。

宮沢さんの森林・林業教育の基礎理念は「山頂・尾根筋聖地論」であった。山頂・尾根筋は分水嶺をなし、地域の自然が集約されたところである。人間の顔に例えれば目に相当する弱い自然で、絶対に人手を加えてはならぬというのだ。丹沢主稜のブナ林はそのシンボルで、無用の長物どころか、抜群の保水力で相模・足柄の両平野、そして京浜工業地帯を潤している、と説いた。青年達の脳裡に深く刻まれた事は言うまでもない。

高度経済成長政策の一環を担う拡大造林政策は、東京オリンピック(昭和39年)を節目とし、首都圏の中核に位置する神奈川県には適合しないものとなってきた。かわって本県に求められるようになったのは森林の多目的利用である。かくて浮上したのが丹沢大山国定公園の設定である。

国定公園は特別保護地区、第一種、第二種、第三種特別地域、普通地域からなる。学術調査の結果、主稜の植生はオオモミジガサブナ群集と決定されこれが公園の核をなすこととなった。土地は財産区や共有林が多い。公園設定となれば、施業制限が伴うので土地所有者は一筋縄では首を縦に振ってはくれまい、と当局はそう踏んでいた。

しかし、それは当局の思い過ごしであった。宮沢さんが教育した青年たちが、この時には当該財産区等の役員に成長していたのである。公園地域の線引き区分に時間がかかろう筈がなかった。

県はいま、水源林造成の推進を期しているが、「山頂・尾根筋聖地論」を肝に銘じて進めるべきである。

広葉樹の苗木が光を受け、爽やかな風吹き渡る成長の森エリア

平成19年度成長の森エリア(16区画)下刈作業完了報告 <事務局長 竹島 明>

足柄上水源の森林推進課から受注した「平成19年度成長の森」エリア(16区画)の下刈作業が、多くの会員の皆様の協力により無事終了することができました。夏の厳しい条件下での作業であっただけに何事もなく無事終了したことをまず感謝したいと思います。

今回の下刈は苗木が小さく、急傾斜地に密植されていることもあり、大鎌の使用が難しく手鎌での作業が中心で、1区画(平均525平方メートル)4人でも半日ではきつい作業でした。しかし、作業前、作業後の写真を見比べていただければお分かりのように、刈り終わった区画では藪に埋もれていた苗木たちがすっと立ち上がり、風に揺れている姿を見ると、仕事の達成感と育とうとする苗木たちの生命力への感動で、仕事の厳しさが報われる思いでした。

今回皆様からエントリーをいただいた延べ人数は63名。当初16区画×4名=64名の計画でしたが、最終的には延べ54名で全区画の作業を完了させることができました。とはいえ、こうした作業は多くの人数で一気に仕上げて行くことがいいのではないかとの反省も残りました。作業後は、沢で鎌砥ぎをし、「後沢」のホースの水で汗を流し、次の作業班への引継ぎを確認して、概2時過ぎには一日の作業を終了することができました。

7月27日には発注者の完成検査を受け、作業内容は良好とのことで特段の指摘事項もなく受注作業を終えることができました。

今回の「成長の森」下刈作業は森林部会、やどりき部会、そして事務局が担当しました。とりわけ成長の森巡視班リーダーの諸兄には作業日当日の班長を引き受けていただいたり、工事写真撮影、整理などをお願いしたりで大変お世話になりました。また毎回参加いただいた会員の方には心よりお礼申し上げます。こうした会員の皆様の筆舌に尽くしがたいご協力、ご尽力が、会活動の基盤を支えてくれているのだなということを改めて教えてくれた盛夏の作業でもありました。



作業前で～す。



作業中で～す。



苗木たちがすっと立ち上がり、風に揺れている姿を見ると苗木たちの生命力への感動が伝わってきました。



鎌砥ぎの面々

どうぶつ・シリーズ 2
やどりき水源林は

びっくり箱
滝澤 洋子(5期)

かながわ森林インストラクターの会は、2002年から「森の案内人」としてやどりき水源林内で水源林の案内をする事業を県より受けています。案内をするには水源林内のことを知らなければならないと、同時に調査活動も行っています。その中の動物班は、よくばりにも、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫その他、とにかく地面から上の動く生き物を対象にしています。それ以前の2000年から、県はやどりき水源林内の整備前後の森の様子を5年間調べるといって「県民参加のモニタリング調査」を行いました。調査員となった県民が指導者とともに調査する事業です。私がこの動物班に参加したことが、森の案内人動物班としても活動するきっかけでした。それまでは野生動物のことは殆ど知識のなかった私ですので、森の中で遭遇する生き物たちの営みには、その都度びっくりさせられ、その度に感動しております。

さて、このびっくりドキドキのやどりき水源林を「びっくり箱」と称して、毎回その箱を開けるのを楽しみにしている私ですが、動物班活動などを通して開けたびっくり箱のいくつかを、数回に分けてご紹介したいと思います。

2006年9月、水源林内のムササビがよく利用している樹洞を見ると、その日もかわいい顔を覗かせていました。でもいつもとちょっと様子が違います。夜行性なのでよく見えないだろうに、それでもいつもは真丸な目をしているのですが、この日は樹洞の縁に顔を傾けて寄りかかっているようです。「なんだか外がいつもと違うなあ。ちゃんと見なくちゃ・・・ああでもダメ。眠くて目が閉じちゃう・・・」目を開けてもすぐうつらうつらしている仕草は、子供っぽく見えました。いつもですと私たちが気になる時は奥に引っ込んでしまいますが、その様子もありません。私たちはそっと立ち去ることにしました。

15mくらい下に移動したところで、真っ赤な手のような形のきのこを見つけました。初めて見るものです。「カエンダケ」だと後で知りました。みんなで取り囲んで、地面に向かってカメラを向けていると、バサッと近くで音がしました。なんと、2mくらい離れた木の目の高さから、ムササビがこちらを見ているのです。私たちに背を向けて、振り返るような体勢です。それから木の上へ素早く登って行きました。どうも谷の下から来た模様。先ほどの樹洞を見ると、寝ぼけ眼だったムササビが、体を大きく乗り出してこちらを見えています。

上に登って行ったムササビは、いったんその樹洞のある木の隣の木へ滑空していき、さらにその先へと姿が見えなくなりました。樹洞から乗り出していたムササビも、また木の中へ姿を消しました。

突然のことでびっくりし、あわてて接写モードのまま写したムササビは、当然のことながらボケて写っていました。こんなに近くでムササビが見られたのに、写真が撮れず残念でした。

さて、皆さんは何が起こったと想像しますか。私が想像した話はこうです。樹洞にいたのは、今夏生まれの子。そして、私たちの近くに来たのは、その母親。私たちが樹洞を見ている時から、きっと母は心配していた。だから大事なわが子を私たちがいじめているのではないかと、心配が極限に達し、危険を冒して助けに来たのではないかと。そして、何でもないことがわかって、子供の所まで滑空していった。「ママ～。僕はここだよ。」樹洞から乗り出していた子は、そう母に言っていたのだ。

この考えを話すと、居合わせた動物班の面々は「何言ってるの」という顔で、その場を後にしたのでした。



カエンダケ

滝澤洋子さんの横顔

1995年 神奈川県知事認定の森林インストラクターとなる。(5期生)

インストラクターの会では、広報・自然観察会部会長・やどりき森の案内人動物班班長等に関わる。また新定着ボランティアの団体に所属し、やどりき水源林内の森林整備に参加している。地元では子供たちに身近な自然を残したいと「大庭自然探偵団」に所属しているが、最近はやどりき水源林に行くことの方が多い。

ほかに全国森林インストラクター・自然観察指導員の資格がある。

私の認識

野鳥その70

高橋 恒通

前稿で が子育てをするタマシギ科のタマシギを紹介しましたので、今回は旅鳥または留鳥のチドリ目セイタカシギ科のセイタカシギ（漢和名：背高鷗、英名：Black-winged Stilt、体長 L=32cm）をご案内致しましょう。体色は ほぼ同色、と図鑑にありますますがその“ほぼ”と表現される相違点は、 の成鳥の頭頂部が黒色なのに対して は濁白色である点です。この点の他は背面が光沢のある黒褐色、頸部、胸前から下面は白色のトゥーンカラーです。

黒く細長く真っ直な嘴とピンク色をした長い脚と併せて実にスマートで美しい姿ですので正しく“名は体を表わす”漢和名の背高鷗、丈高鷗ですからビギナーも初見(ショケン)で覚えられる野鳥だと認識しております。英名でも直訳すると“黒い翼のセイタカシギ”です。

生息環境は、干潟、河口、湖沼、水田、休耕田など湿ったり水の在る処です。脚が長いので脛節(ケイセツ) - 脚の膝に相当する部分 - 近くまで浸るくらいの深さの水の中でも採餌します。



セイタカシギ

小魚、甲殻類、昆虫類の幼虫等を餌とするそうです。私が始めてセイタカシギを観たのが、昭和63年(1988年)頃だったと思います。場所は確か三番瀬か谷津干潟かのどちらかでした。

誰か「干潟の貴婦人と呼ばれる筈だネ」と呟くのを聞き乍ら、銀色に輝く干潟の水溜の中で1羽だけがシルエット気味に佇んでいたのを鮮明に覚えています。

それ以後は、大井の東京港野鳥公園へ行くたびに必ず出逢っております。その折にもボランティアガイドをしている年配のオジザンが「水辺の貴婦人とか干潟の貴婦人、と呼ばれる人気のある野鳥ですヨ」と来園している若い夫婦連れに説明している場面に、一度だけ出会(デクワ)してます。

私の住む伊勢原近辺では、海老名の田園、秦野の或る調整池で観察してます。そして単身赴任していた茨城県下の稲敷市の蓮田でも出逢ってますが、これまで全て1羽だけの姿しか見てません。

図鑑によりますと“セイタカシギは小さな群れで行動する”と載ってますから私の経験は単なる偶然なのかも知れません。

何はともあれ、セイタカシギと言う野鳥はビギナーバーダーでも判かり易く覚えやすい鳥であると強く認識してます。

優美でスマートな此の野鳥は、私が日本野鳥の会に入会した昭和61年(1986年)より約十年前までの我が国のバーダーにとって人気の高い憧れの鳥だったそうですが、千葉県や愛知県下での繁殖が確認されたりした為に“稀な美しい旅鳥”との形容は消滅してます。

この様な傾向は“地球温暖化”と言う良くない流れが急速に加速されつつある事の証拠のひとつだと思わざるを得ません。

さて、今回はチドリ目タマシギ科、今回は同じくセイタカシギ科の野鳥を紹介して参りましたので、順序としてはチドリ目シギ科の野鳥のご案内かもしれません。

然し乍ら、バーダーにとって種の同定(特定)の最も難かしいシギ科を敢えて先送りして、未だにご案内してない山野の鳥達についてもう暫らくの間、紙数を重ねさせていただきます。



セイタカシギ



<参考資料>

- ・日本の野鳥、山溪ハンディ図鑑7
写真・解説/叶内拓哉、分布図・解説協力/安部直哉、解説(鳴声)/上田秀雄
山と溪谷社
- ・フィールドガイド 日本の野鳥、野鳥ブックス
高野伸二著、(財)日本野鳥の会
- ・写真：yahoo 野鳥図鑑

本の紹介

堤 洋 8期

森の健康診断 倉治 光一郎等編

100円グッズで始める市民と研究者の愉快的な森林調査



森林学の研究者とその仲間がボランティアを募って100円ショップ等で市販されている安価な道具で森林の健康調査を行った体験記と調査に至る考え方をまとめ、将来の方向性を示した本です。

ここでは静岡県矢作川流域で行われたボランティア中心の森林調査体験の記録を中心としてまとめられています。

労力奉仕による森林体験は、初心者にはそれなりの感動を呼び汗を流すことが環境保全に繋がるものとしてそれなりの効果は感じます。が、幾度もの体験を重ねると単なる労力奉仕だけかと興味が削ぎかねない。ここで言う健康診断に参加し、森林の現状を肌で感じ、どのように措置すれば健康回復が図れるかと体感することで、従来のボランティア活動が単なる労力奉仕ではなく実態としての環境保全活動として認識し、活動にも意欲を持って参加して頂けると思う。余談ですが、この本では其処までは書かれていないもののそのように感じます。

調査の方法は1チーム4～5人で調査地点を決め、植生調査の実施、植栽木の混み具合を測定するという順序で行われている。予め、調査地点の概略位置を各チーム指定され、その位置に辿着いてポイントを確定し、調査野帳に調査結果を記入する。その場で電卓を叩くと結果の概要が判る。不明点は戻って再計算・整理する。

道具の内 4mの釣竿やバカチョンカメラは1000円では購入できないが他の器材は十分間に合うものとした。調査結果は、間伐の必要性やその他の施策の必要性の判断材料になり、土壌の侵食状況まで判断できる事から、森の健康を判断する十分な資料が得られている。森林調査は県の職員や専門会社、一部の森林組合が行ない、森林の荒廃は他人事であったが、市民が調査から参加する事で森林の現状把握が赤裸々になり、今後の施策を協議する社会との輪が広がり問題解決の糸口が見出せる。

課題は、調査地点に辿着ける程の地形図の読図と方向感覚に優れたリーダーの確保と調査に耐え得る森林計画図・簿が整備されていて行政が貸し出せるかにある。行政単独で実施可能であればこのような活動は起こりえないのだが

(築地書館 2000+税)

活動短信

6/27～8/9

森林レクリエーションとピザづくり

- 日 6月27日(土)9時10分～15時
- 場 小田原市いこいの森
- 参 小田原市募集の15人(子供7・保護者8)
- 森 佐藤ほか 管理人2 小田原市広報写真班1
- イ 斉藤、落合、高橋、横山、

梅雨模様の続いたためか参加者が少なく家族的雰囲気の中で広報のカメラマンのカメラが回る中でスタートした。

午前はおそびの広場、ふれあいの丘(手入れされた雑木林)、飛び石(沢の流れ、サワガニ多数)クヌギの広場(キツツキの穴 クワガタ発見)林のさんぽ道(アブラチャン、ハナイカダの実)など変化に富んだコースは子供だけでなく大人も楽しむことが出来た。

昼は森林組合の管理人の指導で持ち寄った具を使いピザを焼いて食べた。午後の森林講話はカブトムシ、サワガニなどの図鑑を使い森のはたらきを説明、林間遊歩道を歩いて終了した。イベントの様子は後日有線テレビで市民に放映されるとのこと。家族的で楽しい一日でした。

子供たちもよい思い出になると思います。

(記 6期 斉藤)

* 森) 小田原市森林組合の略です。

活動短信

野外体験学習

日 7月9日(木)13時~21時半
 場 横浜自然観察の森
 参 横浜市立西寺尾小学校4年生 79名
 校長、教諭8名

イ L 渡辺、宮本、堀江、斉藤、杉戸、
 武本、時田、海野

天候にめぐまれ、8班に別れ先生1名が付き実施しました。山道は前日の雨で水分貯えた山道で、滑る生徒も少なく、けが人が出なかったことを先に報告します。

今回の生徒は、半袖、軍手無しのヤンチャな元気な生徒が多かった。コースも最初と最後が変わっていたが、最初の暗い森、明るい森の相違を話したく、出発前に組み入れ、スタートする、樹木、植物の話より動く昆虫に興味を示していた。黒文字で良い香りには全員が自然の恵みを味あった。1部が16時で終了しましたが、毒ウツギ、クヌギ林での萌芽更新の観察が出来なかった事が残念に思う先輩がいましたのが印象に残りました。

第2部は、20時半よりナイトウォークでヘイケボタル湿地まで行き、闇の中に飛び交うヘイケボタルの光を堪能してもらった。数量は少ないが生徒は十分満足していた様子でした。ホタルを始めて体験した喜びが我々にも強く伝わってきました。

(記 6期 杉戸)

平成21年度新任教諭研修講座「ふれあい研修」

日 7月22日・24日
 場 愛川ふれあいの村
 参 新任教諭(高等学校・特別支援学校・養護学校
 養護教諭)156名

財 高橋、豊丸、
 イ L 高橋、渡辺、斉藤、鈴木孝、伊藤、
 黒澤、加藤、野田、内野、

新任教諭総勢367名。二日に及ぶふれあい研修の中で、自然観察希望者86名、クラフト希望者70名、合計156名をインストラクター12名で受け持つ。高橋リーダーの森林講話のあと、クラフト班と自然観察班に分かれて研修。

クラフト班：学校で刃物を使わなくなり、先生方も刃物の使い方が分からなくなっているの、書けない鉛筆を作りながら、ナイフの使い方を基本から練習。最初は危ない手つきでしたが、さすがは先生。二本の鉛筆だけでは満足されずにお変わりする先生続出。

自然観察班：雨上がりのためにヒルの歓迎を覚悟の上で自然観察路に出発。案の定ヒルに好かれる人が出てきて、あちこちで黄色い声が聞こえる。それでもリーダーは上手に話を進める。22日の日食は曇りながらも三日月になった太陽を観察することができた。

学校の先生だけあって知識は沢山あるものの、実物と全く結びつかない。学校で子供たちと親しくなるために名前を覚えるように植物の名前を覚え、自然に親しみを持ち、自然の大切さを理解し、さらには、自然のなかで活動できる持ち物・服装で観察を行い、子供たちを自然の中で楽しく遊ばせることができるようになって下さいと話を結び。(記 8期 野田)

水生生物の観察会と木工作りなど

日 7月25日(土)10時~13時
 場 やどりき水源林
 参 日立電子サービス(株)(通称・【電サ】)
 大人19名・子供13名(代表 佐藤佳彦様)

県 有馬
 イ L 竹島、落合、吉山

連日、前線が本州にかかったままの不安定な天候のもと無事終了。紹介が終わり全員でパートナー林看板の前での記念撮影中に、準備。2班に別れ約1時間「どんぐりトトロ」(担当：落合)及び約1時間水生生物観察(担当：竹島、吉山)を行った。木工作りは、本来は、パートナー林で以前から準備されていた間伐材を使用して丸太切りの予定であったが生憎の天候で作業棟の屋根の下での作業となった。準備された色々な材料を使い各人1個思い思いの色々なトトロが出来上がった。水生生物は、これも夏休みの宿題の1つになる様にと、準備された観察シートに今日採取した水生生物のチェックをいれて小冊子と共に持ち帰ってもらった。水生生物はオタマジャクシ、カジカが多く採れた。沢ガニ、ヘビトンビ、ヒゲナガカワトビゲラ等10種類以上豊富に採れた。最後に川に返して終了にした。子供達の生き生きとした姿に私はホットした。半分以上の友達が午後1時からの自然観察に参加されたようでした。

(記 3期 吉山)

学校林の樹木調査と樹木板作り

日 7月25日(土)
 場 芹が谷中学校
 参 環境活動部植生調査班 10名と先生3名
 財 古館
 イ 久保、野田、

学校の環境活動部植生調査班と共に、校舎の周りの木や学校の隣にあり学校林として活用している雑木林の樹木調査とおもな樹木の樹木板作成。

最初に植生調査班が調査した樹木の発表があり、その樹木を確認しながら新しい樹木の調査を行う。森の中で半ズボンでの調査のため子供たちは全員蚊の歓迎をうけ思うように調査が進まなかったが、一時間ほどで調査終了。

雑木林からの資源を有効活用するために、雑木林からの樹木で樹木板を作りたいとのこと。

太い樹木を切り倒し輪切りにして使いたい様子でしたが、20cm前後の硬い広葉樹を輪切りにすることはとても無理。そこで、10cm程度の丸太を半割にして使うことにして、サンプルを6本作りとりあえず木につけることができた。今まで見たことがない素朴な樹木板が出来上がりました。(記 8期 野田)

森林レクリエーションと飯ごう炊飯

日 7月29日(水)9時~15時 曇り
場 小田原市いこいの森
参 小田原市募集の40名(大人10名・子供30名)
森 佐藤ほか
イ L武者、落合、横山、山崎、

午前中、森林内を保護者と共に散策しながら“森林浴”清流の小川では、マイナスイオンを存分に浴び、ゆっくりと植物や昆虫の小動物にも触れながら豊かな自然の中を満喫しました。

昼食は各自で用意した米一合をグループで飯ごう炊飯を行って、共同作業の体験をし、小田原森林組合の佐藤さん達スタッフが用意してくださったカレーをかけていただき参加者一同大満足でした。

午後は、ヒノキの丸太切りを行いコースターづくり、と笹舟を親子で作成し、川に流して楽しく過ごしました。(記 7期 山崎)

明治大学 M - Navi

「里山ボランティアフォローアップ講座」

日 8月2日(日)
場 明治大学(生田校舎)
参 大学生15名(男性8名・女性7名)スタッフ5
イ L清水、大塚、高橋、宮下、

今回は、麻生区健康の森での里山ボランティア講座のフォローアップ、しかも、自分たちのキャンパスでの活動ということもあって学生達には一層真剣さが増しているようであった。作業は午前中に集中し午後に教室での座学との打合せの後、準備運動を十分にやり、指導担当とグルーピング、活動場所の特徴と手順を確認して作業に入った。間もなく雨が降り出し10:30休憩中に雨足が激しくなり11:20作業を中止して昼食休憩に入る。学生達は、有志が準備した流しそうめんに満足し、自然発生的に竹細工・竹笛作りなど高橋さん指導の自然教室で遊び、午後は教室で前回のビデオを鑑賞してその成果を再確認するとともに再会した仲間との新たな絆を体感していた。数ある大学のボランティア活動で里山活動を取上げている大学は少ないとか、より多くの若者の取り組みに期待し今回の先進的企画に感謝して大学を後にした。(記 8期 清水)

ボーイスカウト神奈川の森づくり

日 7月12日(日)
場 秦野市寺山水源林
参 133名
イ L森本、佐藤恭、吉山、出口、佐藤武、鈴木、宮本、小野、渡部、佐藤保、内野、水口、村井、大澤、金森

- ・ B S神奈川連盟創立50周年記念事業として植林された林地での、期間(10年)満了となる最後の下刈。次年度からは、津久井のエリアで設定されそう。
- ・ 結果として生育は良くなかったものの、参加者・関係者を含めて感慨深い作業となった。
- ・ 「森林愛護章」などを取得した、歴代のボーイスカウト諸君のこれからの期待。弥栄。

(記 5期 森本)

皆様のお力添えで植樹から10年間経過し、残った樹は少なくなりましたが、初期の目標を達成することが出来ました。植樹時から、森林インストラクターの皆さんにお世話になりましたので、お礼申し上げます。蛇足ながら、森本、佐藤恭平、宮本、出口、渡部、公社の金子理事長、工藤職員もボーイスカウトです。(記 7期 渡部)

全国のコカ・コーラ「森に学ぼう」プロジェクト

日 8月9日(日)9時半~16時
場 宮ヶ瀬湖畔園地内「昆虫の森」
参 一般募集90名 <子供55名>(予定は100名)
共催 コカ・コーラセントラルジャパン(株) 宮ヶ瀬ダム周辺振興財団
イ L浦野、森本、小野、斉藤、金森、

当該会社が毎年実施の「水源地域を訪ねる体験」(第4回)に応募した幼児から小中学生を伴った親子連れが対象で、森林保全体験学習(我々が担当)カヌー体験教室、自然観察教室(プロのナチュラルリストが担当)の3つのプログラムを3班交代制で実施、開・閉会式の時間を除けばそれぞれが正味1時間の体験である。我々は夏緑広葉樹を主体とした林内の下枝落としおよびカヤの下刈を各回30名前後、3回の指導を行なった。短時間で枝打ちと下刈り両方を体験してもらうということから現場に集合と同時に5班に分け林内に展開してから作業の仕方や森林保全とはなどを説明することにしたが少人数のため質疑も多く出たことなど効率的であったと考えます。共催団体が用具はもちろんヒル対策スプレーなどの準備、大勢のスタッフの配置など万端でしたが、やはりヒルの被害が多数に上り、また蜂の巣に気付かず刺された人が1名居たことは今後の反省点です。天候不順が続いていたが当日はくもり時々晴れの天気でもあり参加した親子が興味を持って取り組んでもらえた様子はうれしいことでした。ただし3つの中では圧倒的にカヌーが「面白かった」との事後感想はやもうえぬか。(記 8期 浦野)

—森林文化講演会のお知らせ—

2009年11月29日【日】13時半~15時半
演題「豊かな生態系は、地域の宝」
 暮らしと森をつなぐ森林管理の第一人者
名古屋大学名誉教授・農学博士 只木良也氏
会場：桜美林大学・プラネット淵野辺キャンパス
問い合わせ；E-mail s-m-colt@mail.plala.or.jp
森林文化部会・内野ミドリまで、お気軽に・・・。

